

平安文学、いとをかし

—国宝「源氏物語席屋・漣標屏風」と王朝美のあゆみ

静嘉堂@丸の内（丸の内明治生命館1階） 24.11.16～25.01.13

王朝文化が花開いた平安時代には、漢詩や和歌、物語や日記などさまざまなジャンルの文学作品が誕生し、平安文学は日本美術のなかでも重要なテーマとしてあり続け、時代を超えて数多くの作品に影響を与えている。

本展では、国宝3件重要文化財5件を含む「平安文学」を題材とした絵画書の名品と、静嘉堂文庫が所蔵する古典籍から「いとをかしな平安文化」の世界に誘われ、輝きにあふれる「平安文学の魅力」に触れることができる。



俵屋宗達《源氏物語関屋漣標(みおつくし)図屏風》国宝 江戸時代・17世紀

漣標とは、船に水脈や水深を知らせるために建てられた「杭」のことで、古来漣標がよく知られていた。『源氏物語』第十四帖「漣標」と第十六帖を題材とした作品は、国宝に指定された3点の1つとして著名な屏風で、今回絵具の剥奪や画面の亀裂等の全面的な修理が行われて約10年振りの公開である。

直線と曲線を見事に使い分けた大胆な画面構成、余地に緑と白を主張とした巧みな色づかい、古絵巻の様からの引用など画伯の魅力伝える傑作である。

《住吉物語絵巻》(部分) 鎌倉時代・14世紀

重要文化財

継母に虐げられる姫君と姫君を一途に想う少将の恋を描いた作品。

《駒競行幸絵巻》鎌倉時代・13～14世紀

重要文化財

藤原氏の栄華を豊かに叙述する『栄花物語』の荘重華麗な一場面の作品。



この2作品は、2年間にわたる修理を経て美しい画面がよみがえった。